

2-1 「幸運な偶然」を活かす（に活かされる）ひきこもり支援

17でも少し触れたが、ここでは、「幸運な偶然」について述べる（竹中：2016）。ひきこもる人の支援あるいは家族によるケアの先が見えにくい時期であっても、先の見えなさに耐えつつ（「負の能力」を要する。帯木蓬生：2017 参照）、何らかの支援やケアを継続することにより、支援・ケアの試みの中の何かがきっかけになり、大小にかかわらず、何らかの予期せざる前向きの転機を迎えることがある。これが「幸運な偶然」である。これは支援・ケアを継続していなければ訪れなかった好機であるともいえる。このことを筆者は「幸運な偶然を活かす（に活かされる）支援・ケア論」と称することもある。このようにして、支援者や家族は、時には40歳代後半を過ぎた時期であっても働き始める人があることを経験することもある。

ひきこもり支援は、「気長に、急がず、あきらめず、可能な範囲で本人と対話をしながら、支援者・家族が知恵を出し合って取り組むこと」が大切である。ひきこもる人から見るならば、「幸運な偶然」とは、「いくつかの望ましい条件が重なって閉ざされていた視界が開けた状態」とでも言えようか。こうして、本人が「今なら動けそうだ」と内心に意欲を感じ一歩を踏み出すときであろう。私たちは、そのときがいつどのように訪れるのかを予想することが難しい。そのためにも「気長に、急がず、あきらめず、支援を継続する必要がある」ということになる。

（注。）内閣府のひきこもりに関する近年の調査結果

①内閣府（2016）「若者の意識に関する調査」の全国推計値：ひきこもり：54.1万人、ひきこもり期間7年以上が34.7%で最多。（調査対象は15～39歳に限定）（調査時期は2015年12月）

②内閣府（2019）「生活状況に関する調査」：調査時期2018年12月、調査対象40～64歳（全国で5000人抽出）。有効回収数（本人）3248人、広義のひきこもり群：該当者47人、全国推計数61.3万人。年齢40代38.3%、50代36.2%、60～64歳25.5%。（調査方法の一部変更はあるが、①の全国推計値の54.1万人と②の全国推定値の61.3万人を単純合計すると115.4万人になる。「ひきこもりは100万人を超えるのでは」という関係者の推定は現実味を増すこととなった。）